

特集 (Special feature)

三兎を追う者は－教員生活49年を顧みて－

Reflection of my scholarly and teaching life in 49 years

武山 隆昭
Taka-aki Takeyama

1. 高校の国語教諭になる

高校2年と3年の時、「古文」を教えていただいた鈴木拓郎先生にあこがれ、高校の国語教師になろうと決めて名古屋大学文学部に入学した。国文学の松村博司教授から古典文学の研究方法を学び、『住吉物語』についての考察を卒論にまとめ、高校の国語教諭となることができた。

若気の至りと言うか、高校の国語教師となったからには一流の国語教師になろうと心に決めた。そのために当面の課題として、『住吉物語』の研究を続けることと、国語の授業の仕方を改善することとを設定した。間もなく、良い授業をするためにも文学研究のためにも、「語彙」(就中語義)の追求が大切であることに気付き、名大岡岡孝教授(国語学)主催の「名古屋ことばのつどい」に入れてもらい、刺激を受けつつ自分なりに語彙研究を始め、月例会で発表した。半田高校で同僚となった大学の先輩、榊原邦彦・藤掛和美氏らと『枕草子総索引』『狭衣物語総索引』を刊行したりして、古典文学の語彙研究に力を注いだ。教科書に出た古語と、同じ意味で用いてある他の用例を示しながら語義の説明をすると、生徒は良く理解してくれたようである。

次の勤務校が「教育工学」の研究指定校となったため、教育機器を使った授業を実践し研究授業を公開した。さらに、作文教育(文章構成法)の理論「アウトライン」を、評論(論理的文章)の読解指導に用いる指導が有効であるという授業方法を考案し、愛知県教委主催の教研集会で発表したり、新任教員研修会の講師に任命されたりした。

また、昭和44年改訂の高等学校学習指導要領に準拠させた「古文」教科書を作成する右文書院の編集委員に加えていただき(松村先生の推薦による)、掲載作品の選定、本文の校訂、注付け、問題の作成、指導書の執筆に携わった。(以後、平成10年改訂学習指導要領準拠版まで継続)

2. 大学の教員に

こうした私の姿勢を評価してくださった、大学の先輩で「名古屋ことばのつどい」

の重鎮であった清水功先生（椋山女学園大学名誉教授）の推薦を受け、諸手続を執ってくださった結果、昭和51年度から椋山女学園大学文学部国文学科の専任講師として大学教育に携わることとなった。

私のポストは国語学担当ということで、「国語学概説」をメインとしたので、語彙論を中心とする国語学の論文作成に邁進した。3年ほど経った時、椋山正弘理事長から「教科教育法は専任が担当するのが望ましいから、担当して欲しい」とのお言葉をいただき、「国語科教育法」をも担当することとなった。（それまでは名大附属高校の酒井為久先生が非常勤講師としてご担当）そこで、国語科の指導法・授業の進め方を研究のテーマに加えることにした。そうした中で、私の研究生活（と言うほどでもないが）の出発点である『住吉物語』についてももっと考察を進めたいという気持ちが強まってきた。

このようなわけで、私は三兎を追うことになった次第である。すなわち、第一の兎は、「語彙研究」を中心とした国語学の分野である。そして第二の兎は、『住吉物語』を中心とする平安朝文学の分野である。さらに第三の兎は、国語科教育法なのである。しかし、二兎でさえ得ることが難しいというのに、三兎を追う私が一兎をも得られなかったのは当然で、努力したつもりではあるが、どの分野でも研究史に特筆されるような業績を残すことは出来なかった気がする。そんな中で、私のなしたことをささやかではあるが三分野について振り返ってみたい。

3. 国語学の分野

昭和42年に刊行した、初めての編著書『枕草子総索引』（共編）は、私にとって文字通り国語学界へのデビュー作である。当時、『万葉集』や『源氏物語』の語彙総索引はあったが『枕草子』はなかったので、用例を捜すのに不便であった。出来るだけ多くの用例を集め、それらの意味用法の検討から帰納的に語義を決定するのが、古典語彙研究の基本である。従って、その頃から各古典文学作品の語彙総索引が次々と刊行されるようになった。私も続いて『狭衣物語総索引』（共編）を、さらにメンバーは変わったが『平家物語語彙用例総索引』（共編）を作った。

その後、辞書や注釈書の説明や解釈が不十分であったり説の割れている、「中の十日」「あざやか・けざやか」「めでたし」「うつくし」「かげろふ」「すずむし」「格子と半蔀」について語義を規定する論文を書いた。また、「す・さす」の文法機能に関する考察結果も書いた。

近頃は、パソコンを用いて計量国語学的手法による語彙研究に関心を持っている。「古典作品の形容語使用状況についての考察——古典対照語い表FD版・分類語彙表を用いて——」（平成20年3月）などである。

4. 『住吉物語』を中心とする平安朝文学の分野

『住吉物語』は、『枕草子』(「物語は」の段)、『源氏物語』(螢の巻)に名前が出てくるれっきとした平安朝物語であるのに、文学史の教科書には「本文は早く散逸し、現存の『住吉物語』は、鎌倉時代になってから物語名を借りて改作されたものである」と記述され、中世物語の中に入れていた。この通説に抗して、私は現存する『住吉物語』の写本・板本の中から代表として16本を選び、語彙史レベルで比較検討をした結果、諸本間にあまり差異の無い物語の骨子部分は平安朝語彙で表現されており、差異の大きな箇所(後人の加筆や改変)に中世語彙が見られることを実証した。また、登場人物の官位と役職、観音信仰や行事風俗等が平安時代を反映しているとの結論を得て、現存本の祖本は清少納言や紫式部が読んだ古本と根本的な差異はないことを立証した。平成9年刊行の『住吉物語の基礎的研究』(文部省科学研究費助成出版)はその集大成である。その後、文学史の教科書にも、平安朝の物語文学として記述するものが現れてきた。

また、『かげろふ日記』の大学受験用学参、有精堂校注叢書『住吉物語』・影印校注叢書『源氏物語〈朝顔・乙女〉』の注釈付きテキストを書かせていただいた。

『源氏物語』を〈桐壺〉から〈夢浮橋〉まで約八年かかって通読する、栄中日文化センターの「源氏物語全講」を25年余り担当させていただいていることも、私にとって良い勉強であり又生き甲斐にもなっている。

5. 国語科の指導法の分野

文学部(国際コミュニケーション学部の前身)で、中・高等学校の国語教員免許状取得希望者のために開講されている「国語科教育法」(後「国語科の指導法」と改称)を担当することになってから、中・高教科書の〔言語事項〕に関する記述の比較考察を学習指導要領改訂の度ごと追跡的に行い、いくつかの論文にまとめた。これには、高校教諭時代から右文書院という小さな出版社が出している、高等学校国語科「古典」「古典講読」「国語総合」などの教科書編集のお手伝いをしていることも与って力となった気がする。

また、講義ノートを元に、私家版のテキスト『国語科教育法ノート』を作成したのは平成9年4月であった。以後二年ごとに増補改訂して、平成21年4月の『新しい国語科教育法(四訂版)』まで出した。国語科教育の二本柱は、「言語教育による思考力表現力の養成」と「文学教育による人間性の陶冶」とである。私家版のテキストに於いて、前者に関しては〔言語事項〕と「書くこと」の指導において種々の工夫を提起した。後者に関しては、「読むこと」の指導の章を多く設定して、「形象理論」「三読法」「一読総合法」「分析批評」「『読み研』方式」などの指導理論についてそれぞれの長短所を解説した。

平成19年度のスタートをめざす教育学部開設のメンバーに加わることになり、小学校国語科の指導法にも手を広げることとなった。小学校（特に低学年）では、「話すこと・聞くこと」指導が大切であるとの思いから、考察を紀要に発表した。また、私家版テキスト『小学校国語の指導法』（平成21年、翌年改訂版）を作成し講義に用いた。その「あとがき」に記した、「自戒」を次に転載させていただく。これが私の教師観なので。

最後に、私が自戒として心掛けている「教師心得五箇条」を書きます。自分でも十分守れているとは言えませんが。

1. 日々成長しつつある児童生徒達と接する教師は、日々進歩しつつある人間でなければならない。学問的にも、人間的にも。〈自己研鑽を怠らない、惰性にならない〉
2. その一年は、教師にとっては教師生活三十数年分の一年かも知れないが、児童生徒にとっては貴重な成長期のかけがえの無い一年である。しかも、児童生徒は先生を選べない。だから教師は、全力を傾注して（Trial and error は許されない）Trial and success を期さねばならない。〈一期一会を大切に。生徒を実験台にを使って、「新しく考案した教育効果が上がると信じる方法で実践したAクラスと、従来の方法で実践したBクラスとの成績（テストのクラス平均）を比較して、前者の方が十五点も上であった」などという指導方法改良の研究発表をする教師は許せない。Bクラスの生徒の立場は？ 児童生徒をモルモットにするなど言いたい〉
3. 教育とは、「育た教（し）むる」ことである。（「教え育てる」なんておこがましい）。自ら育とうとする生徒の能力を信じ、手助けするのが教育である。〈学校では児童生徒が主役、教師は脇役でサービスパーソン〉〈この自覚さえあれば、腹を立てて理性を失い、生徒に暴力をふるうことはないはず。冷静に叱ることは大切〉
4. 嘘を教えない。間違いに気付いたら出来るだけ速やかに訂正する。（教師の面子とやうにこだわってごまかすのは最低）〈すぐやる人、行動力のある教師〉
5. 常に児童生徒の方を向いた姿勢で全ての教育活動を行う（校長や、教育委員会の方ばかり向いた教師にはならない）。公平に接するとともに、児童生徒一人一人が家庭では大事な子（というよりかけがえのない命なのだ）ということを常に心に掛けて日々の実践をする。〈クラスの生徒を ALL=MASS ではなく EACH=COMPONENT で捉える〉生徒に好かれる教師よりも、生徒に信頼される教師になりたい。

6. 教員生活の超想い出二つ

*その1：教え子からの手紙

高校教諭の時、2年生で担任した石田展弥君から久しぶりに手紙が届いた。曰く「今日、医師国家試験の合格証が届きました。まっ先に武山先生にお知らせしたくてペンを執りました。と申しますのは、時習館の職員室前の芝生で文学部から医学部に志望

を変えたいと相談しましたとき、『決心が堅いのなら言おう。君のような文化系の頭をもった医師も日本の国には必要なんだよ。神経科精神科の医師は、人情の機微が理解出来る文化系の頭を持った人の方が名医に成れると思うんだ。頑張りたまえ』とおっしゃった先生のお言葉がずっと心の支えだったのです。受験勉強の数学や理科も大変でしたが、大学に入ってから周りの理科系の連中にバカにされながら、菌を食いしばってここまで持ちこたえられたのもあのお言葉のお陰です。……」読んでびっくりすると同時に、教師の言葉の重大さを改めて痛感した次第である。彼は琵琶湖病院で精神科医長を勤めた後、現在、病院長兼理事長をしている。

*その2：卒業30年目のゼミ旅行 part II

昨年夏に、昭和54年度のゼミ生新谷生子さんから自宅に電話をいただいた。年賀状の行き来はしており、一昨年のホームカミングデイでも顔を合わせたからよく記憶している卒業生である。曰く「MちゃんやOさん達と相談しているのですが、卒業30周年記念に武山ゼミのゼミ旅行 part II を実施したいと思うんです。先生、私達を引率していただけないでしょうか。奈良は今年イベントをやっていますし」といった趣旨である。

毎年4年生のゼミ生と、その年の演習テーマに即した文学散歩のゼミ旅行を実施してきたが、あの年は4年生の演習で『伊勢物語』を採り上げていた。「昔、男初冠して、奈良の都、春日の里に知るよしして、狩りに行きけり。」(第1段)にちなんで初日は奈良へ、2日目は京都で御所や京都市文化博物館、惟喬親王や在原業平にちなんだ遺跡を訪れた。その旅を再現しようというのである。武山ゼミ以外の人にも声を掛け出来るだけたくさん参加者を集めたいとのことである。10月2・3日と決め、準備に入った。

当日は、ゼミ生11人、他に8名、計19名の参加者があり、2日は興福寺・春日大社などを廻りゼミ旅行の時と同じ旅館に泊まって、3日に「奈良遷都1300年祭」の会場を見学した。30年の歳月が一瞬にしてプレイバックされて、52歳のおばちゃん達(失礼)が22歳のお嬢さん達に戻った二日間であった。私もすっかり40歳の助教授に戻っていた。

物作りとは違う職種の教員にとって、卒業生の存在こそが生きた証である。

7. 教育学部の4年間を振り返って

平成19年4月に開設された教育学部のスタッフの一人となった。先生方は、これから新しい学部を自分たちで作るのだという意気込みで頑張っておられる。こうしたアクティブな雰囲気の中で、教員生活最後の4年間を過ごせたことは大変ありがたいことであった。

初代学生委員長の野崎先生は、新入生ガイダンスの一環としてまず「ふれあい遠足

(リトルワールド)」を企画された。早速友達作りが始まって中には生涯の友との出会いを得た学生もいただろう。又、「禁煙講座」では健康について再認識する機会が得られ、ご自身が身障者であられるミュージシャンの「演奏とトークショー」では社会福祉を身近な問題として考えるきっかけとなった。これらの諸企画を精力的に立案運営なさり、第一期生の意識を高めてくださった。教務委員長の国井先生は、複雑なカリキュラムを実際に時間割表に当てはめるため、ABCDとabcdefとの二種類のクラス分けを考案なさり、スムーズな授業展開が可能になった。キャリア委員長の酒井先生は、学生たちが希望する教員・保育士採用試験に合格できるように、一年時から周到な計画の元に種々の企画を実行してくださった。過去問による模擬試験、その反省を指導教員と一緒にを行い今後の勉強計画を話し合ったり、採用試験の面接官経験者を講師にお迎えしての面接実習を継続的に実施したり、科目別の対策講座も専任スタッフに割り当ててくださった。私も、国語と小論文対策を担当させていただき、少しはお役に立ったかなとささやかな満足感を嘯みしめている。

「数学」「音楽」の教員を目指す学生たちに対しては、数学・音楽の先生方が親身になってご指導なさっていた。初代学部長の甲斐先生、主任の大森・宮川両先生のチームワークの良い学部運営と、全専任教員・事務職員の団結とで、第一期生の就職状況で満足できる成果を上げえたことは何よりの喜びである。今後とも教育学部の更なる発展を祈る次第である。

22歳から71歳まで、49年間の教員生活にピリオッドを打って8か月、この稿を書いている私は、本当に幸せであったとつくづく思う。良い環境の職場、立派な上司先輩同僚に恵まれ、生徒・学生にも恵まれ、先学非才の身でありながらそれなりの満足感をもって定年を迎えることが出来たのであるから。改めて、お世話になった全ての方々に感謝の念を捧げるものである。ちなみに、私の干支は卯（兎）である。